

『元RQ妻、他人の雄に寝取られる—見るだけの夫の末路—』

【序章】四年前の淫夜 ～告白の前奏曲～

東京の梅雨は、空気そのものを重く、湿った布のように肌に纏わりつかせる。

窓硝子を叩く雨の音が、リビングの静寂を規則正しく刻んでいた。午後九時。俺はソファの奥に沈み込み、スマートフォンの青白い光に照らされた顔を、妻の姿のない空間へ向けた。

検索履歴の文字列——「寝取られ」「Cuckold」「見ているだけ」「他人のモノでイク妻」——が、未だに画面に残っていることに、微かな羞恥と、それ以上の解放感を覚えた。

俺は三十二歳。結婚して三年。美桜(みお)とは、彼女がまだレースクイーンをしていた頃、サーキットのイベントで知り合った。当時、俺は自動車メーカーの営業マンで、ピットレーンで輝く彼女の笑顔に一目惚れし、猛烈なアタックの末に結婚した。

それから三年。俺たちは東京の郊外にマンションを買い、共働きの夫婦として平穏な日々を送っていた。

平穏すぎた。

何もない日々に、俺の中で何かが渴望していた。それが何なのか、はっきりとはわからなかった。ただ、毎晩のように見ていたAVのジャンルが、徐々に「寝取られ」に傾いていったことは確かだった。画面の中で、他の男に抱かれる女を見ながら、自分の妻の顔を重ねてしまう。そして、想像するたびに、胸の奥が締め付けられるような痛みと、同時に股間が熱くなるのを感じていた。

浴室から、シャワーの水音が止まった。

湯気がリビングまで流れてきて、ラベンダーの香りが漂う。俺は慌ててスマートフォンをポケットに仕舞い、テレビのリモコンを手にとった。チャンネルを適当に回す。映る映像の意味など、頭の片隅にもなかった。

「ふー、気持ちよかった」

美桜の声が背後から近づいてくる。俺は振り返る。

彼女はバスタオル一枚で、濡れた髪をタオルで拭きながら歩いてくる。湯気に蒸れた肌は、二十六歳にして未だに艶めかしく、鎖骨のラインが水滴を湛えて光っている。バスタオルの丈は短く、太ももの付け根が覗きそうな位置で止まっている。四年前、彼女がまだRQをし

ていた頃——サーキットのピットで、ピンクのレオタード姿でポーズを取っていたあの頃——の、肢体と重なる。

「何見てんの？」

美桜はソファの隣に腰かけ、足を組む。その仕草が、俺の視線を自然と彼女の脚へと誘う。スラリとした太もも、膝の小さな窪み、ふくらはぎの曲線。バスタオルの隙間から、白い下着の紐が覗いていることに気づき、俺は慌てて目を逸らした。

「別に。適当に」

俺はテレビの画面を見つめたまま答える。しかし、心臓の鼓動が速くなっているのを自分でも感じていた。美桜の存在が、ソファの沈み方で伝わってくる。彼女の体温、ラベンダーの香り、湿った髪の毛の匂い。すべてが、俺の中の何かを刺激する。

「おかしいなー。今日、変だよ」

美桜は身を乗り出し、俺の顔を覗き込む。濡れた前髪が、彼女の大きな瞳にかかる。俺は、その瞳に自分の姿を映す。どこか落ち着きのない、浮ついた表情。

「……美桜」

「ん？」

「聞きたいことがあるんだけど」

「なに？」

俺は深呼吸をした。リモコンをテーブルに置き、膝の上で手を組む。指が震えているのを、彼女に見られないように隠す。

「昔の話なんだけど」

「昔？」

「美桜がRQやってた時。チームのみんなと、飲みに行ったりしてたよな」

美桜の表情が、一瞬だけ凍りついた。しかし、それはほんの一瞬のことで、すぐにいつもの明るい笑顔に戻る。

「うん。よく行ったよ。雅也とか、タカシとか。覚えてる？ 紹介したことあるよ」

「ああ」

俺は頷く。確かに、結婚する前に、一度だけ彼女のRQ仲間と飲んだことがある。当時、雅也という男は、美桜に対して親しげに接していた。タカシは、黙って酒を飲んでいた。

「その時……何か、あったりしたのか？」

質問は曖昧だった。しかし、俺の意図は、彼女に伝わったようだった。美桜は、一瞬、目を逸らす。それから、再び俺を見つめ、口角を上げる。

「……あったよ」

俺の心臓が、鼓を打つように鳴った。胸の奥が、締め付けられるような痛みと、同時に熱を帯びる。

美桜は立ち上がり、冷蔵庫に向かう。バスタオルの裾が揺れ、腰の曲線が覗く。彼女は水の入ったボトルを取り出し、背中を向けたまま、しばらく黙っていた。水滴がボトルの表面を伝い、床に落ちる音が、奇妙に大きく聞こえる。

「……言っていない？」

彼女の声が、小さく震えていた。俺は頷く。彼女は振り返らず、ボトルを握りしめたまま、続ける。

「あの時……私、翌日のRQイベント、出られなかったじゃん」

「……ああ」

「熱が出たって言ってたでしょ」

「ああ」

「嘘だったの」

彼女は振り返る。濡れた髪が、肩に張り付いている。瞳は、挑戦的に、しかしどこか怯えて、俺を見つめていた。

「四人で……やったの。朝まで」

俺の股間が、確かに硬くなっているのを感じる。それは、嫉妬だけではなかった。何か別の、より深い、より暗い興奮。

「……知ってた？」

美桜が問う。俺は首を振る。彼女は小さく笑った。笑い声は、最初は驚きを含んでいたが、次第に、何か別の感情——理解、あるいは興奮——に変わっていくように聞こえた。

「今さら何？嫉妬してる？」

「違う」

俺は否定した。しかし、声が震えている。

「……見たい」

「は？」

美桜は眉を上げる。俺は、もう一度言葉を繰り返した。

「美桜が、他の男と……するのを。俺は、見てるだけ」

言葉が出てしまった。後戻りはできない。俺は、自分の言った言葉の重みに、頭がくらくらするのを感じた。美桜は、水のボトルをテーブルに置き、ゆっくりと俺に近づいてくる。バスタオルの裾が床を撫でる。彼女は、俺の前に跪くようにしゃがみ込み、顔を覗き込んだ。

「……マジで言ってる？」

俺は頷いた。美桜の瞳が、俺の瞳を覗き込む。湿った髪の毛の滴が、彼女の鎖骨を伝い、胸の谷間へと消える。俺は、その水滴の行方を、視線で追ってしまう。

「俺じゃ満足できないんだ。美桜が、他の男に……夢中になるのを、見てるだけでいい」

美桜は長い沈黙の後、小さく笑い出した。

「変な人」

彼女は立ち上がり、寝室へ向かう。バスタオルの裾が揺れ、腰の曲線が最後に一度覗く。俺は、ソファに座ったまま、彼女の後ろ姿を見送った。

しかし、寝室のドアの前で、彼女は立ち止まった。手をドアノブにかけたまま、振り返る。

「……考えとく」

それだけ言い、彼女は寝室の中へ消えた。ドアが閉まる音が、静かなリビングに響く。

俺は、ソファに一人取り残された。股間の硬さを確かめながら、翌日への期待と恐怖を同時に感じていた。窓の外では、雨が激しくなり、街のネオンが濡れたガラスに滲んで、ぼやけた光の粒となって散っていた。

～つづく～